資源環境経済学特別演習 II 議事録（１１月）

２０１１　年　度　第　９　回

報告題名　自己同一性に着目した集落の持続可能性に関する一考察

報告者　渋谷俊	**日時　　11 月 24 日　午後３時～**
（所属分野）　環境経済学分野	**場所　第二講義室**
座長　今井　貴浩	**議事録担当者　滝田　雄基**

出席者

長谷部、木谷、安江、米澤、米倉、冬木、高篠、石井、韓、スチン、宮里、矢部、易思、威廉、王、北村、金、滝田、タンボウニ、中村、堀、山口、林、泉井、金（銀）、黄、今井、渋谷、室井、ナスンムンク、徐、趙、劉、王（偉）、伊坂、薄井、菅野、佐藤、西田、丸林

報告要旨

近年，人口のうちの半数を 65 歳以上の人が占める集落は，限界集落と位置づけられ，将来消滅する可能性のある集落として大きな社会問題になっている．限界集落を示す指標は，集落の高齢化率という統計上のマクロ的な観点からのみの評価が一般的であり，その指標は集落の方向性を捉えきれない．ここでは，集落の実情や住民の意識に着目したミクロな視点から集落の方向性を捉えた集落をみる新たな視点として集落の自己同一性を挙げ，持続可能性の観点から集落を評価する枠組を提案する．加えて、集落に住むことへのこだわりとの関係性についても検討する．

まず，集落の自己同一性について考えるために，集落をひとつの生命体と捉え，生命体としての集落の持続可能性と集落の自己同一性の関係ついて考察する．次に限界集落と呼ばれている集落に対して調査を行ない，高齢化率，集落の自己同一性，集落に住むことへのこだわりとの関係性を調べる．

調査対象地は，宮城県内でも高齢化率が極めて高い七ヶ宿町の二つの集落を対象とする．限界集落を多数抱える半面，宿場町として全国でも有数の歴史をもつ七ヶ宿町の中の，町制定以前から地域の中心集落であった湯原集落と関集落に注目する．同じ国道沿いながら関集落と比較すると湯原集落の高齢化率の方が高くなっている．高齢化率でみると，湯原集落の方が衰退しているようにみえる．

調査の結果，二集落のあいだに自己同一性に関して大きな差異はみられない．また生命体としての機能や住むことへのこだわりについては二集落間に差がみられ，高齢化が進む湯原集落の方がむしろ生命体としての機能が維持され，集落に住むことへのこだわり（集落を残していきたいという意識）に関しても，持続可能性の高い可能性が示唆された．

卒業論文では自己同一性確立の二つの契機のうち、他者との関係に着目して調査をおこなったが、修士論文では、もう一つの契機である歴史的連続性についての調査も行い、集落の自己同一性を評価する枠組みを更に精査する。今回の発表では、その歴史的連続性についての調査案を示し、今後の研究計画について発表する。

質疑・応答

丸林：２つの集落を比較調査して、高齢化率が違うところでも自己同一性には差がなかったということですが、集落の自己同一性がどの程度あれば高齢化が違っても持続性はあるのですか？例えば、自己同一性がある集落では高齢化率が高くても持続していけるのか？

渋谷：住むことへのこだわり等が生まれたりすれば、他の所から入ってくる可能性もある。

丸林：自己同一性が高ければ、高齢化が進んでいても今後改善されたりするのですね。２つの集落はどのような場所なのですか？地理的に他の集落と隔離されているんですか？

渋谷：七ヶ宿という宮城県で一番高齢化が進んでいる市町村であり、その中の関と湯原は大きな集落でした。関の方は七ヶ宿町の行政機関が入ってきて、日本全体で見ると高齢化は進んでいるが、町で見れば比較的若い集落です。湯原はかなり進んでいます。

丸林：山間で、移動するのにも苦労するほどではないのですか？

渋谷：集落ごとに離れています。

宮里：生命体としての集落ということについてですが、渦が無くなる状態が自己同一性の損失ということですが、例えば、見るからに高齢化が進んで若い人がいないが、祭り・盆・正月に若い人が帰ってくるという時には、それは生命体としての集落は生きているのか死んでいるのかどちらなのでしょう？その概念はどう捉えればいいのでしょうか？

渋谷：一時期帰ってくるということですか？

宮里：文化の担い手として帰ってくるという場合などです。

渋谷：自己同一性が確立されているとしたら、若い人たちが帰ってきたときに『自分たちの集落である』と意識するような機会を持てるようなときが生まれることによって、再び帰ってくる機会は多くなると思います。

山口：生命体の説明をスライド４でしているが、スライド８での生命体としての集落の死の条件があるが、普通の限界集落とどこが違うのですか？

渋谷：図の矢印は人の出入りを表しているが、限界集落の指標というのはその左右の矢印しか見ていなくて、渦の部分を把握出来ていないのではないかと考えています。

山口：もちろん人の流れが無ければ高齢化し、人口も減少します。且つ渦の消失とありますけど、人がいなければ渦はなくなりますよね。

渋谷：１の流れ（人口減少・高齢化）と２の流れ（渦）は独立しています。１の流れ自体が止まってしまうのが今考えられている『集落が持続していかない』ということだと思います。２は、人の流れがあっても渦が無ければ持続していかないというのが自己同一性が無いということではないかと思います。

山口：集落としては機能しているが、人の出入りが無ければ、ここでは生命体としての死という判断をしているのですね？

渋谷：今言われたのは、１の方ですね。

高篠：人の流れがあってもアイデンティティ的な活動が無ければ死んでいるということは、都会の街は集落としては死んでいると考えていいのですか？
渋谷：集落という領域と都市という領域では歴史的な特徴、例えば厳しい慣習・保守的な部分が強いと思いますが、よくわかりません。
高篠：自己同一性が高い集落は閉鎖的ではないかというイメージがあり、プラスに働くこともあるが、マイナスに働くことも考えられるのではないかと思います。評価方法の枠組みを提案するのが目的ではないかと思うのですが、枠組みを作ることがどのように利用できるのか話を進めるときに、人口増加の関連性で分析に使うといったことになると思うのだが、そのあたりはどうか？
渋谷：人口増加させないといけないというより、人口減少・維持させてどういう意味があるのかという根本的なことを取り上げています。どう役立てていくかというのは、地域作りなどで歴史的な面も大事なのではないかということを、新しい地域作りを行う上で視点を提案したい。

冬木：都市ももう死んでいるのでは？農村だけがきついわけではない。都市は先に死んでしまっている。人口増加と結びつけるとすると、この枠組みは間違っている。出入りが無くて死んでいくのはかまわないわけで、渦の自立性を失ってまで残していく意味はあるのか？ということでもある。湯原などは特にそうではないかと思う。質問は技術的なことで、高齢者への訪問していき、町史をベースにするということだが、高齢者といっても６０代位では町史に書かれていることが既に無いのでは？あくまで町史ベースにすると、現在を青年会だけでなく高齢者も現在に含めるべきなのでは？
渋谷：過去のことは町史に書かれていることだけで行こうかと思ったが、聞き取り調査で町史以外のことも挙がってきたので、今も続いていることを抽出するためにも高齢者にも聞き取りを行う。

米倉：細胞自体が構成する生命体についてのアイデンティティはない。細胞一つ一つとそれにより構成される生命体とは関係はない。それをどう解釈したのか？
渋谷：……。
冬木：調査の結果、一人ひとりがアイデンティティが無いにもかかわらず集落の機能や文化が維持されていけば面白いのではないか。
米倉：都市のほうが生命体に近いのではないか？
　福岡さんの話は細胞一つ一つのＤＮＡを否定する理論ではないか。ＤＮＡは生命体情報をすべて持っている。集落を構成する個々人はそういうものではないか？集落についての完全情報なんて誰も持っていないのでは？
渋谷：町史や、昔のことを知っている人に聞いていきたい。

山口：自己同一性を軸に集落を評価するんですよね。アンケートの項目のいくつかは高齢化が進むに連れてなくなっていくだけのものもあると思うのですが？
渋谷：高齢化が進んで出来なくなったとしても形が変わって続いていっているものがあると思う。それも持続していると捕らえる。
山口：限界集落など普通の概念とはまったく別の軸で評価するのですね。
渋谷：高齢化率、人口減少が全然関係は無いということでなく、それに加えて何かあるのではという考えです。